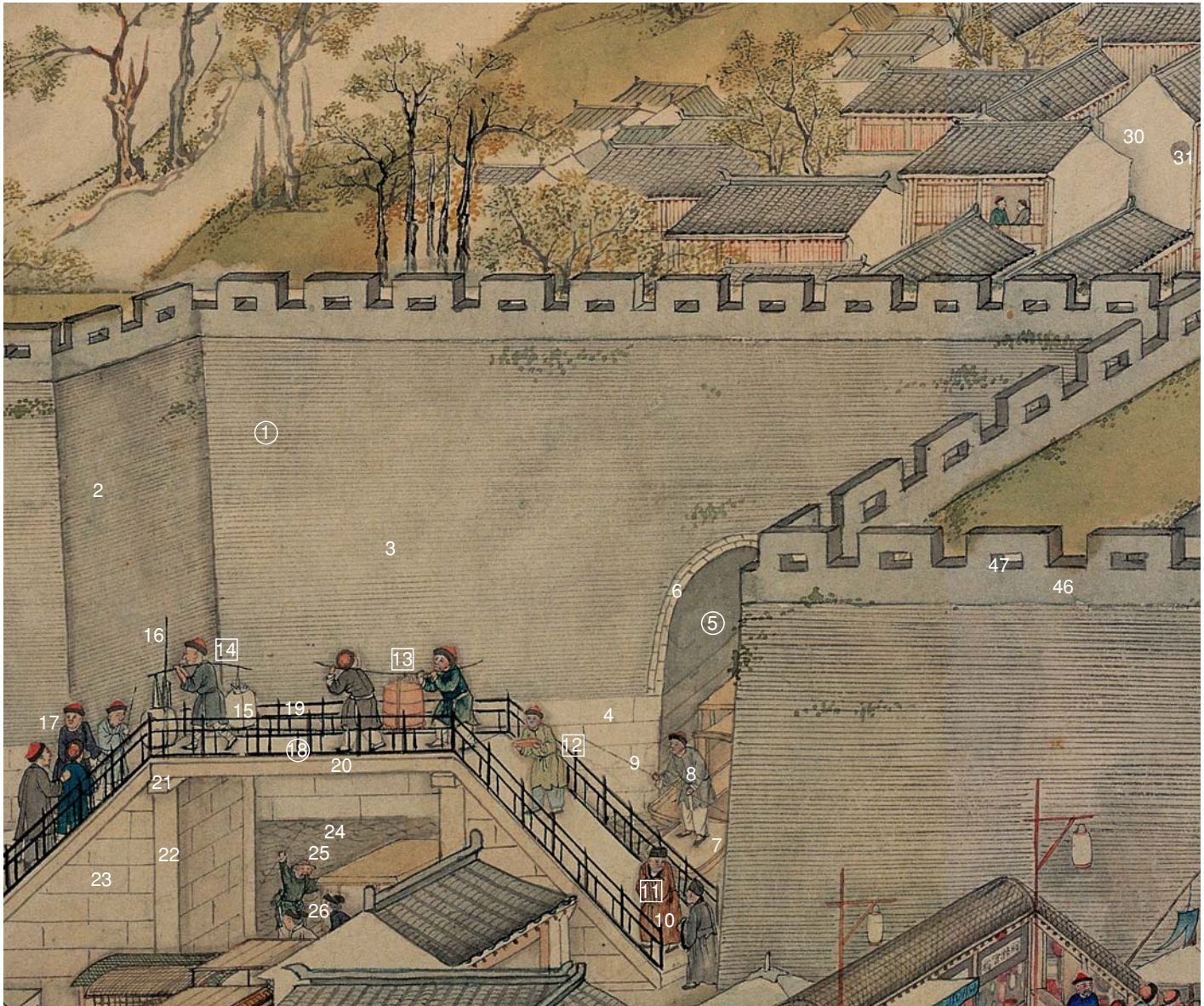


V

権力の表象



45 城門



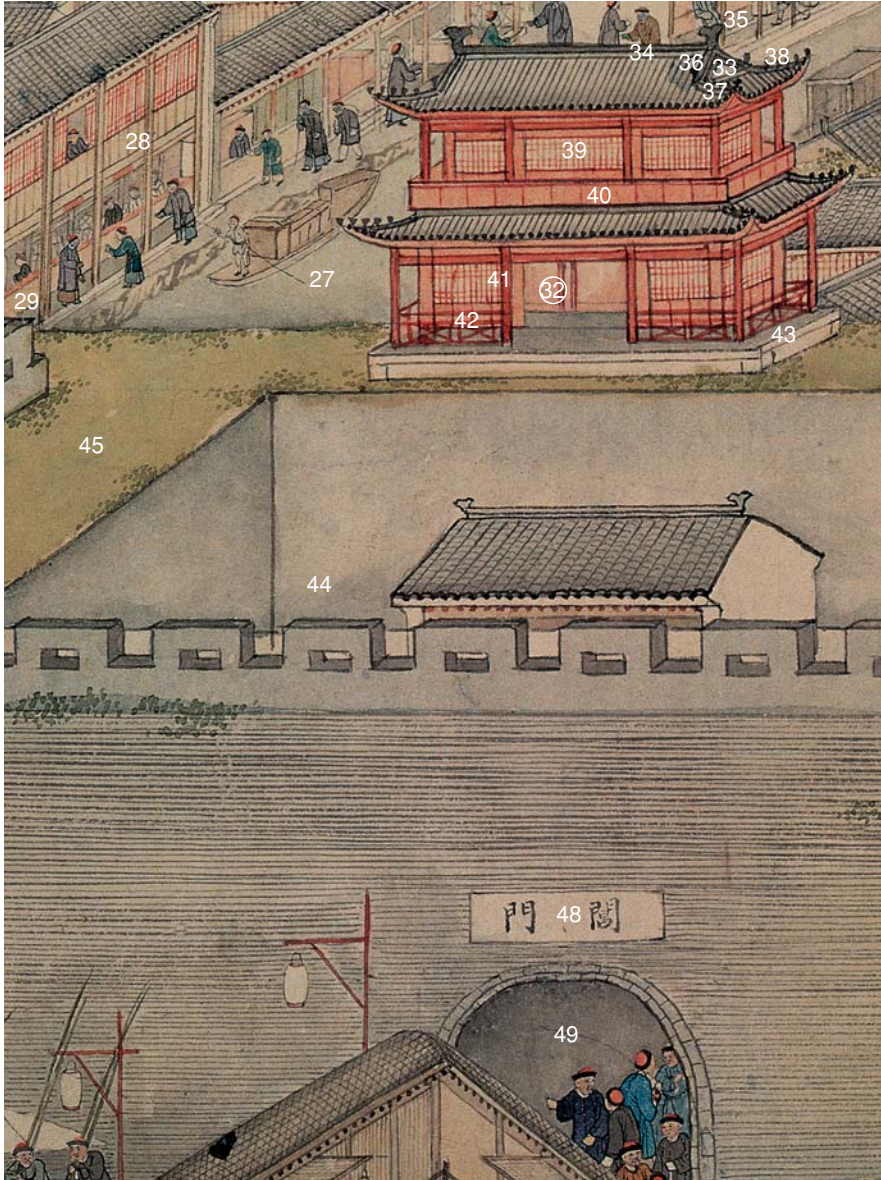
蘇州城西北の閘門である。瓮城、水陸二つの城門及び周辺の城壁の構造がはっきり描かれている。

中国では「都市」のことを「城市」と称するのが一般的であり、大小の都市は全周が城壁で完全に囲まれるのが普通であった。

城壁を築く際に用いられた工法は古くから「版筑降土」と言われ、2枚の厚板を一定の間隔を開けて平行に並べ、その間に土で埋めて突き固める作業を重ねるものであった。明代以降、青磚、即ち城壁用煉瓦の生産が発達し、それで城壁の外側を造り、その間を土で固める工法が普及した。今日一般的にイメージされた堅牢で美観の整った煉瓦城壁は明清時代に一気に広がった。

蘇州は江南の要地であり、城も立派であった。基礎は大きな切石で固められ、やや傾斜を帯びた外壁から生えた草類が煉瓦の隙間から伸びている。アーチ型の城門の上に大きく「閘門」という門額があり、城門を出入りする人々も見られる。

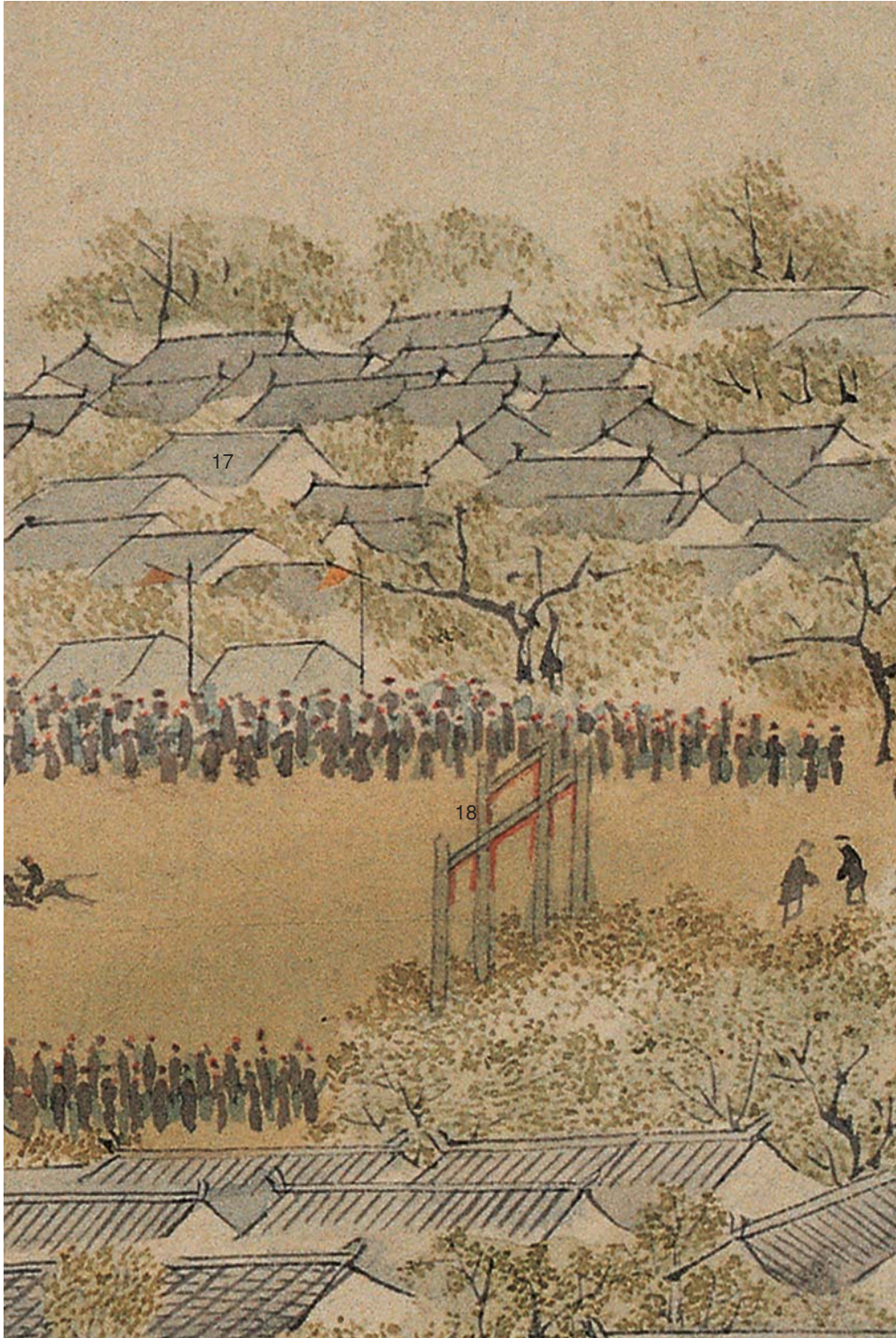
中国では城には必ず城楼がある。画面の右上に二階建ての楼閣が見える。屋根には権威の象徴である5頭の竜が飾られており、柱などもすべて朱塗りである。アーチの城門から城楼までは「回」の形をしているが、これは「瓮城」という。「瓮城」は外側の城門が陥落してもすぐに落城にならないための防御用の施設であり、一般的に重要な城門にしか作られない。城壁の上部に連続と連なる「凸」形の「女



- ① 城壁 (城牆)
- 2 馬出し (馬面)
- 3 煉瓦 (青磚)
- 4 切り石 (条石)
- ⑤ 水門
- 6 アーチ (拱券)
- 7 船
- 8 船頭
- 9 棹
- 10 僧侶
- ⑪ 両手を交差させて袖に入れる (籠手)
- ⑫ 両手で持つ
- ⑬ 二人で担ぐ
- ⑭ 天秤棒で担ぐ
- 15 包
- 16 竿
- 17 話し合う人々
- ⑮ 桁型の石橋 (方孔石橋)
- 19 木の欄干
- 20 桁石
- 21 梁石
- 22 橋杭 (橋柱)
- 23 側壁 (山花牆)
- 24 橋の下 (金門)
- 25 外堀 (護城河)
- 26 女性
- 27 水路
- 28 二階建て店舗
- 29 カウンター (柜台)
- 30 切妻 (山牆)
- 31 丸窓
- ⑳ 城楼
- 33 入母屋
- 34 大棟 (屋脊)
- 35 鴟尾 (正吻)
- 36 降り棟 (垂脊)
- 37 隅棟 (戩脊)
- 38 傍吻 (脊獸)
- 39 連子窓
- 40 羽目板 (檻牆)
- 41 柱
- 42 高欄 (欄杆)
- 43 基壇 (台基)
- 44 枅形 (瓮城)
- 45 通路 (戦台通道)
- 46 狭間胸壁 (女牆)
- 47 銃眼 (砲眼)
- 48 額「閘門」
- 49 城門

「牆」は兵士が隠れながら射撃するための装置であり、城壁の外側に突起する部分の「馬面」を利用すれば、攻めてくる敵を挟み打ちにすることができる。

城の周辺は外堀を設けるのが一般的である。蘇州城では、この西側の外堀はまた大運河の一部でもある。城内は水路が発達しており、閘門では船用の「水門」も設けられている。船2艘が交差できる幅があったようだ。水門では水面下は太い丸太の杭が打ち込まれ、夜は上から鉄の閘門が下ろされたのだろう。その水路を渡るために桁型の石橋が建てられており、様々な人々が往来している。(王)



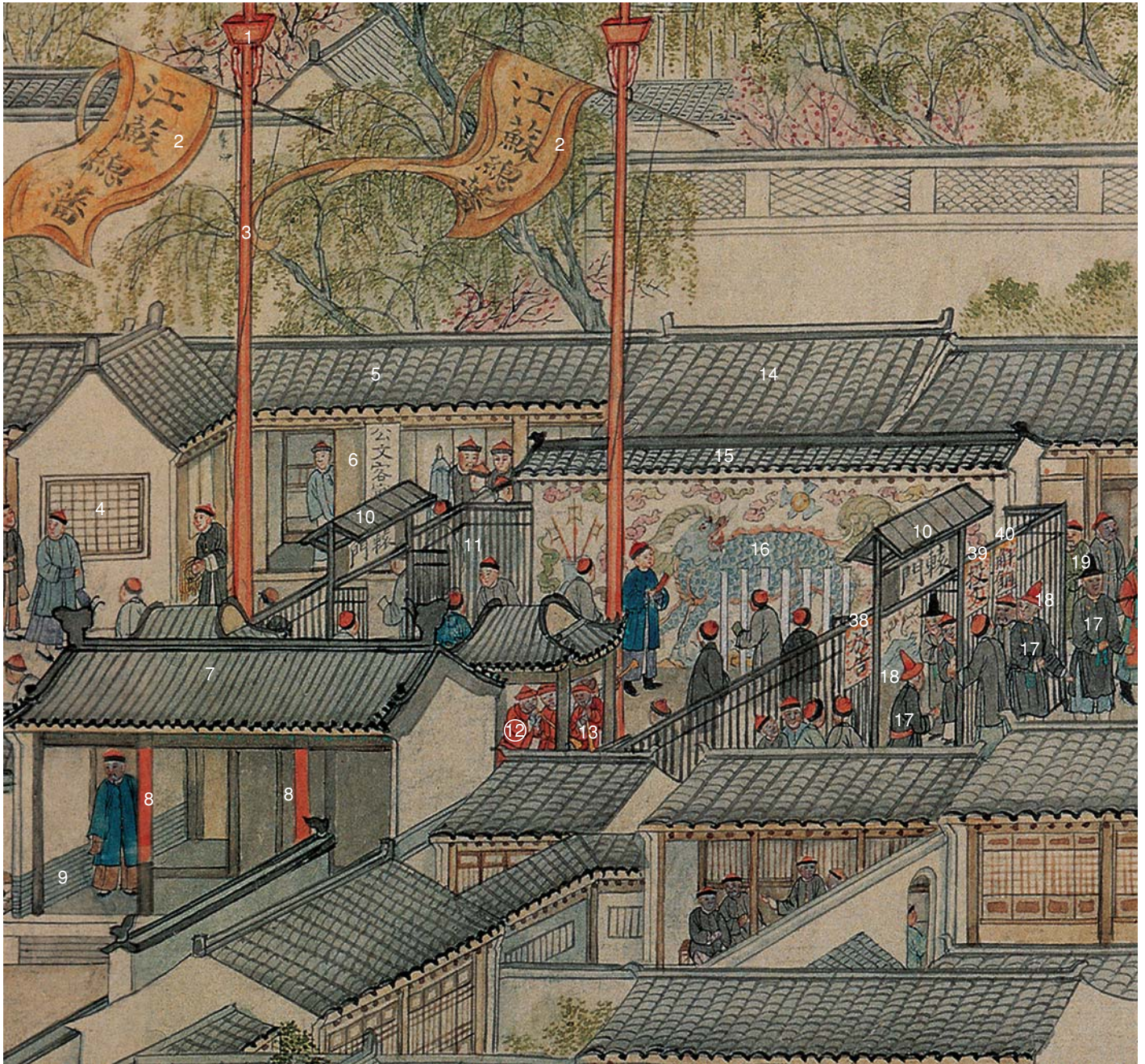
- 1 城楼
- 2 城壁（城牆）
- 3 城門
- ④ 練兵場（教場）
- 5 演武庁
- 6 基壇（台基）
- 7 石段（踏躑）
- 8 耳石（垂帶石）
- 9 滑車（旗竿斗）
- 10 横竿
- 11 旗
- 12 旗竿
- 13 旗竿石
- 14 小旗
- 15 兵士
- 16 馬術訓練
- 17 民家
- 18 牌楼

る広いグラウンドの両側に、軍隊の詰め所がある。正面に高い基壇があり、その上に演武庁が構える。もう一つの小さい基壇に、旗竿を立てる石台がある。旗竿の上から約1/3のところ、旗を掲げる滑車がある。練兵中のしるしとして、この旗は必ず訓練が始まる前に上げられ、終わると降ろされる。多くの

練兵場では、一本の旗竿に三角形の旗を二枚掲げるといい、「姑蘇城図」でも二枚の三角形の旗であるが、ここに見られるのは、一枚の長方形の大きな旗である。

演武庁の向かい側に、四本柱の牌楼があり、練兵場の位置を示す役割を果たしている。（彭）

47 役所の門前



この場面、及び次の場面は蘇州城内の役所を描いたものである。このあたりの道路は治安のためか少し不思議な構造になっていて、南北を通る道路が二つの門でしきられ一通り抜けすることも出来るようにはなっているが—それぞれに「轅門」という額が掲げられている。南、或いは北から轅門に入ると東側に魔除けの影壁が設けられ、聖獣麒麟が描かれている。門の側には巨大な「江蘇總藩」の旗が立てられている。影壁と向かい合うように、通りの西側に役所の東門と、見張りのためのものか四阿が設

けられている。役所に入るには、轅門をぬけてから東門、南門（これが正門か）を通らなければならないようになっている。

南側の轅門の更に南側の通りには、官僚の行列の先導、或いは随行した面々がたむろしている。「粛静」（静かに！）、「回避」（寄れい！）などと書かれた看板、複数の旗指物、行列に随行した人々が持たされていた矛や槍などが見える。官吏の行列は華やかであり、かつ示威のためのものであって、その随行の人々の服装や、手にする武具が芝居じみている



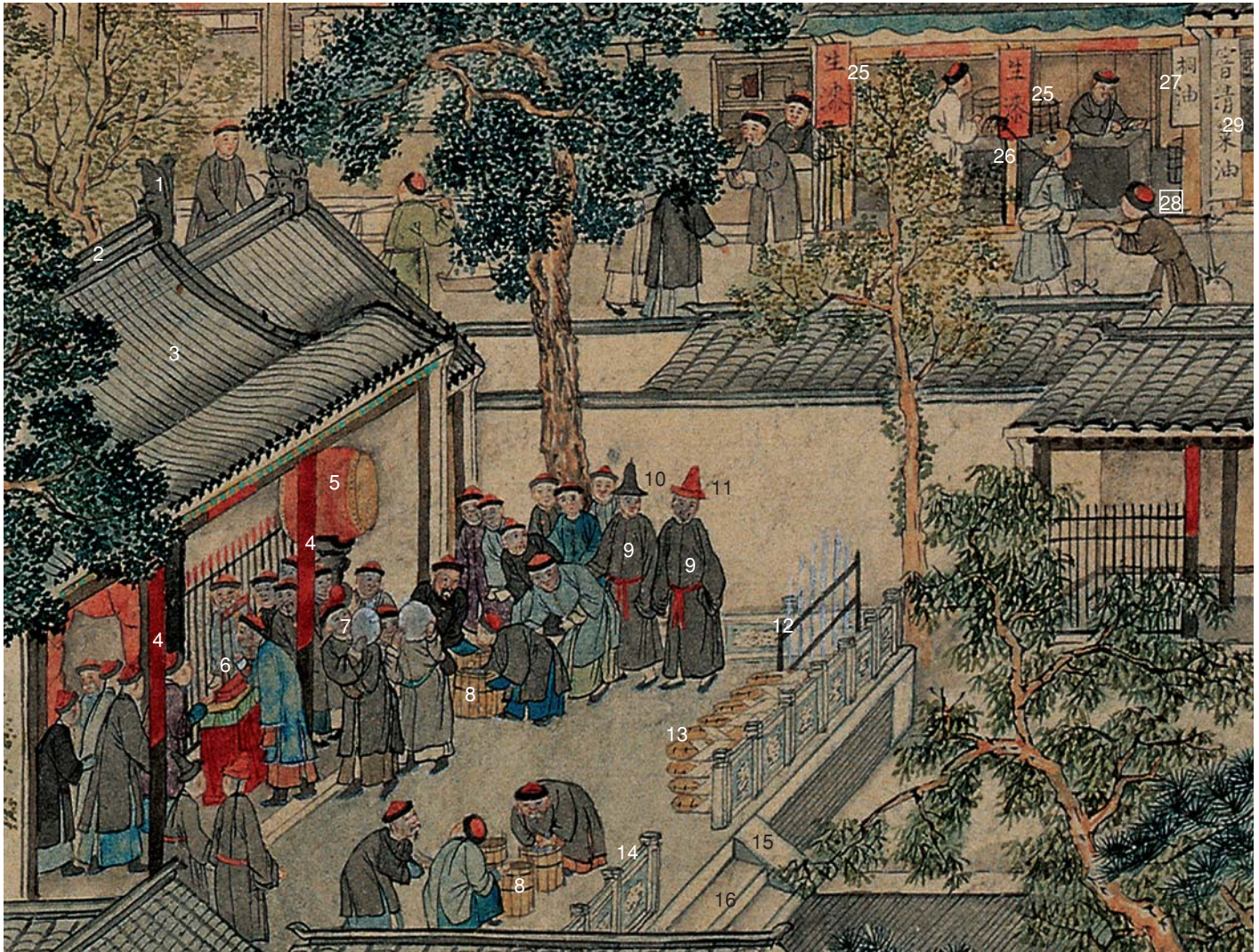
- 1 滑車（旗竿斗）
- 2 役所の旗「江蘇総藩」
- 3 旗竿
- 4 格子窓
- 5 旅館
- 6 看板「公文客寓」
- 7 役所の東門
- 8 対聯
- 9 腰（勒脚）
- 10 額「轅門」
- 11 格子
- ⑫ 楽隊
- 13 喇叭
- 14 瓦屋根
- 15 魔除けの壁（影壁）
- 16 麒麟
- 17 役所の下級役人（皂隸）
- 18 赤い帽子（紅帽）
- 19 黒い帽子（黒帽）
- 20 儀仗兵
- 21 槍
- 22 竜頭杖
- 23 長刀
- ⑭ 二階建て店舗
- 25 軒瓦（滴水）
- 26 垂木（椽）
- 27 窓（檻窓）
- 28 羽目板（檻牆）
- 29 通し柱
- 30 叩き（揮子）
- ⑮ 窓から下を見る
- 32 標示牌「江蘇布政使司」
- 33 標示牌「肅静」
- 34 標示牌「回避」
- 35 ふちどりのある旗（鎧旗）
- ⑯ 担い棒で担ぐ
- 37 封印された銀塊
- 38 札「放告」
- 39 札「投文」
- 40 札「解餉」
- 41 看板「棉花」

のは、当時としては当然のことであった。

行列が使用した看板の中に布政使司と書かれているのが見え、通りや役所の中に銀塊や銅銭を詰め、封印した荷が見えるため、この行列は集めた税金を役所に納めるためのものであったろうと思われる。

この役所の周辺には、公事のために役所を訪れた人々のための宿屋も見えるが、通りの南側は綿花の卸、提灯屋など通常の商店や仕舞屋が見られる。所謂官庁街という雰囲気は全く感じられない。（鈴木）

48 税銀の入庫



- | | | |
|-------------------|--------------|-----------|
| 1 鷗尾（正吻） | 22 柱 | 43 馬 |
| 2 大棟（屋脊） | 23 担い棒で担ぐ | 44 布製の長靴 |
| 3 瓦屋根 | 24 封印された銀塊 | 45 看板「靴舗」 |
| 4 対聯 | 25 看板「生漆」 | |
| 5 太鼓 | 26 熊手鋤（鉄塔） | |
| 6 金銀を量る天秤 | 27 看板「桐油」 | |
| 7 円盤状の銀塊 | 28 天秤棒で運ぶ | |
| 8 銀塊を入れた桶 | 29 看板「甕清菜油」 | |
| 9 役所の下級役人（皂隸） | 30 風呂敷を肩に掛ける | |
| 10 黒い帽子（黒帽） | 31 竿秤 | |
| 11 赤い帽子（紅帽） | 32 看板「上江青炭」 | |
| 12 刀かけ | 33 靴屋看板「三進齋」 | |
| 13 税銀運搬用の木製金庫（銀鞘） | 34 番頭（店主） | |
| 14 欄干 | 35 座り込んで話す | |
| 15 耳石（垂帯石） | 36 吹流し（幌子） | |
| 16 石段（踏躰） | 37 輿（轎子） | |
| 17 正門（南門） | 38 帽子（暖帽） | |
| 18 門神 | 39 上着（外套） | |
| 19 扉 | 40 手甲袖（馬蹄袖） | |
| 20 対聯「帝徳如天」 | 41 長着（袍子） | |
| 21 対聯「臣心似水」 | 42 布靴（布鞋） | |



轅門の西側にある門を抜け、そこから更に北側にある門を抜けるとそこが役所であり、税金を納める場所である。税金は銀塊、もしくは銅銭で集められているものと思われ、欄干の側に積み上げられた平たい包みは銅銭、画面右端の桶には銀塊が入れている。桶にも包みにも×印が見えるのは、封印されていることを示す。左手の建物には訴えに来た人が叩く巨大な太鼓と格子が見え、更にその手前に天秤がおいてある。この天秤で重さを量ってから国庫に納めるようになっている。

この場面では、とんがり帽子を被った役所の胥吏、銀塊を日にかざして確認する人々、桶の中から銀塊を取り出す人とその様子をのぞき込む人など、それぞれの動作と表情が細かく描き分けられている。

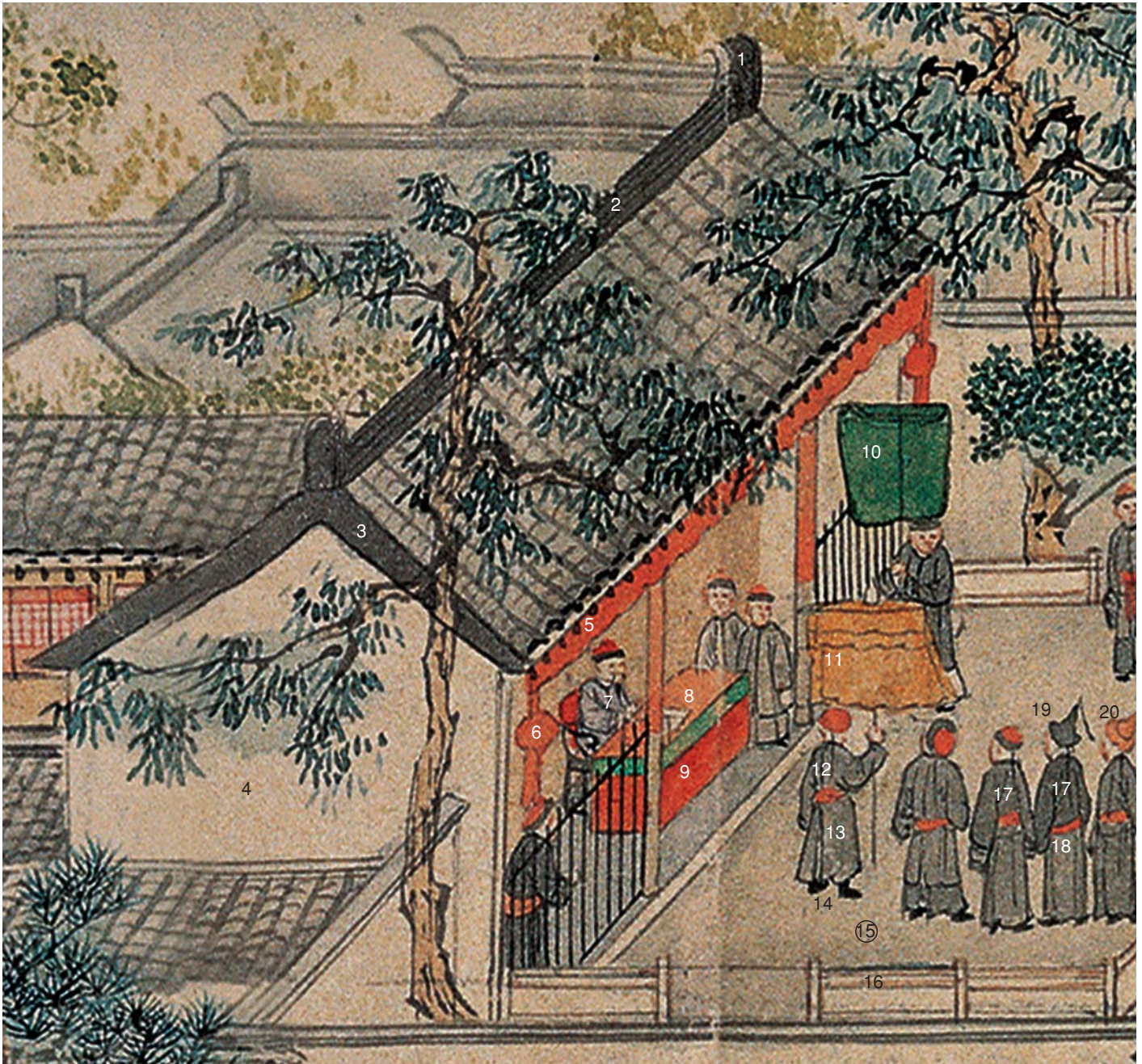
右手の門の入口の柱には「帝徳如天、臣心似水」

という対聯、門扉には門神が描かれている。門神の姿がかなりはっきり分かるような描き方で、これは文臣を神とした文門神であろう。

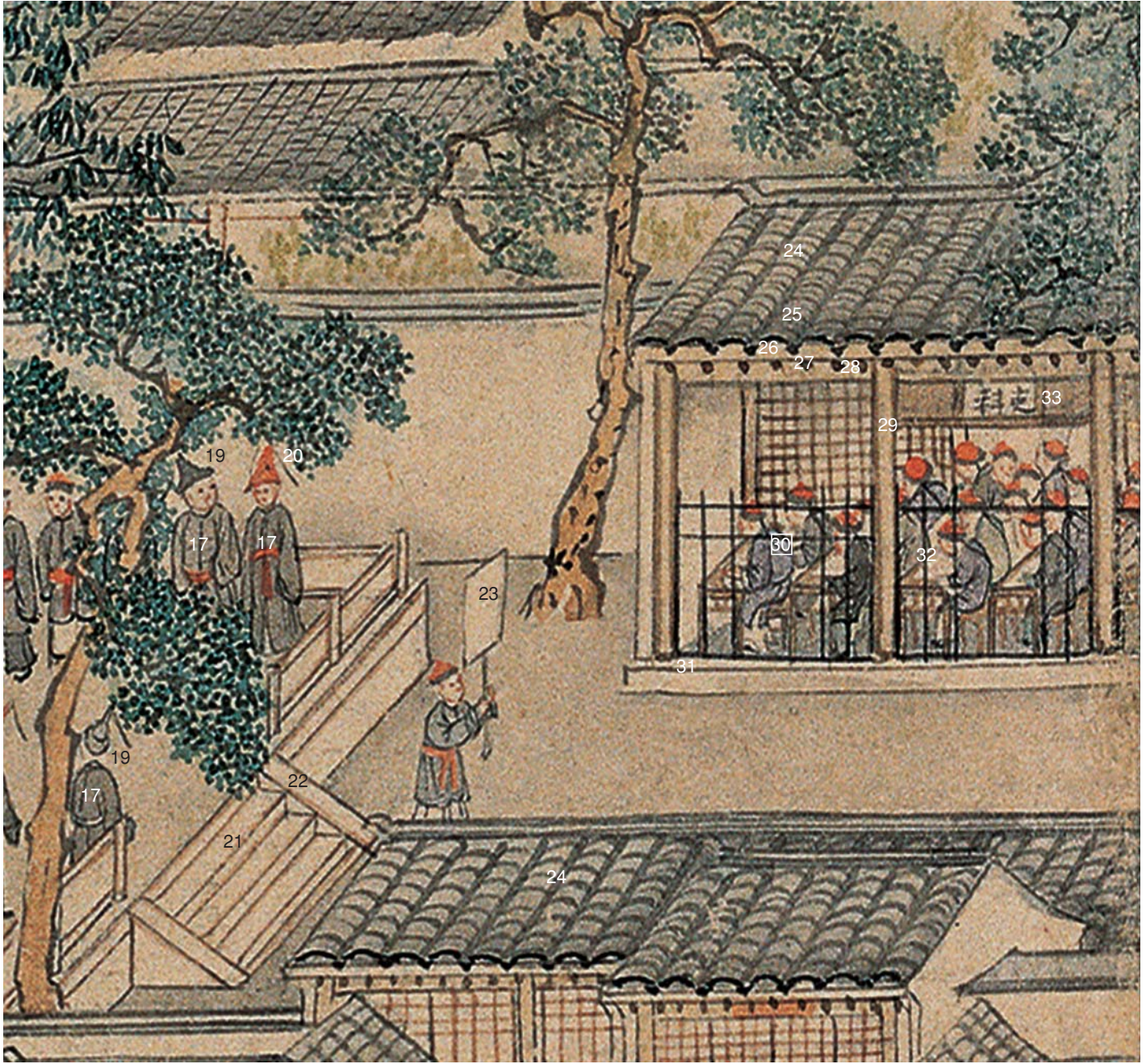
役所の東側の通りには三進齋という長靴の老舗、炭と油、それに漆及び漆器を売っている店が並ぶ。油屋の店の中には竿秤を持っている店員がいる。竿秤には籠が提げられているので、炭を小売りしているらしいことが分かる。

油屋の前には熊手を担いだ人が通り過ぎ、三進齋の前には座り込んで話している二人の人物が描かれているが、道路に座り込む人物がなぜ描かれているのかよく分からない。また画面中央やや右手に、赤い箱を大事そうに抱えた役人が描かれているが、何をする人物なのか不明である。(鈴木)

49 試験官と受験生



- | | | |
|-------------|---------------|-------------|
| 1 鴟尾 | ⑮ 基壇（台基） | 29 柱 |
| 2 大棟（屋脊） | 16 石の欄干 | ⑳ 試験を受ける |
| 3 降り棟 | 17 下級役人（皂隸） | 31 地覆石（階沿） |
| 4 切妻（山牆） | 18 赤い扱き帯（紅汗巾） | 32 答案用紙（試卷） |
| 5 飾り暖簾（彩綱） | 19 黒い帽子（黒帽） | 33 額「吏科」 |
| 6 薬玉（彩球） | 20 赤い帽子（紅帽） | |
| 7 試験監督 | 21 石段（踏躰） | |
| 8 机 | 22 耳石（垂帯石） | |
| 9 机のカバー（桌裙） | 23 標示札（告示牌） | |
| 10 芭蕉扇 | 24 瓦屋根 | |
| 11 華蓋 | 25 軒瓦（滴水） | |
| 12 辮髪 | 26 瓦座（封檐板） | |
| 13 上着（外套） | 27 垂木（檐椽） | |
| 14 布製の長靴 | 28 長押（額枋） | |

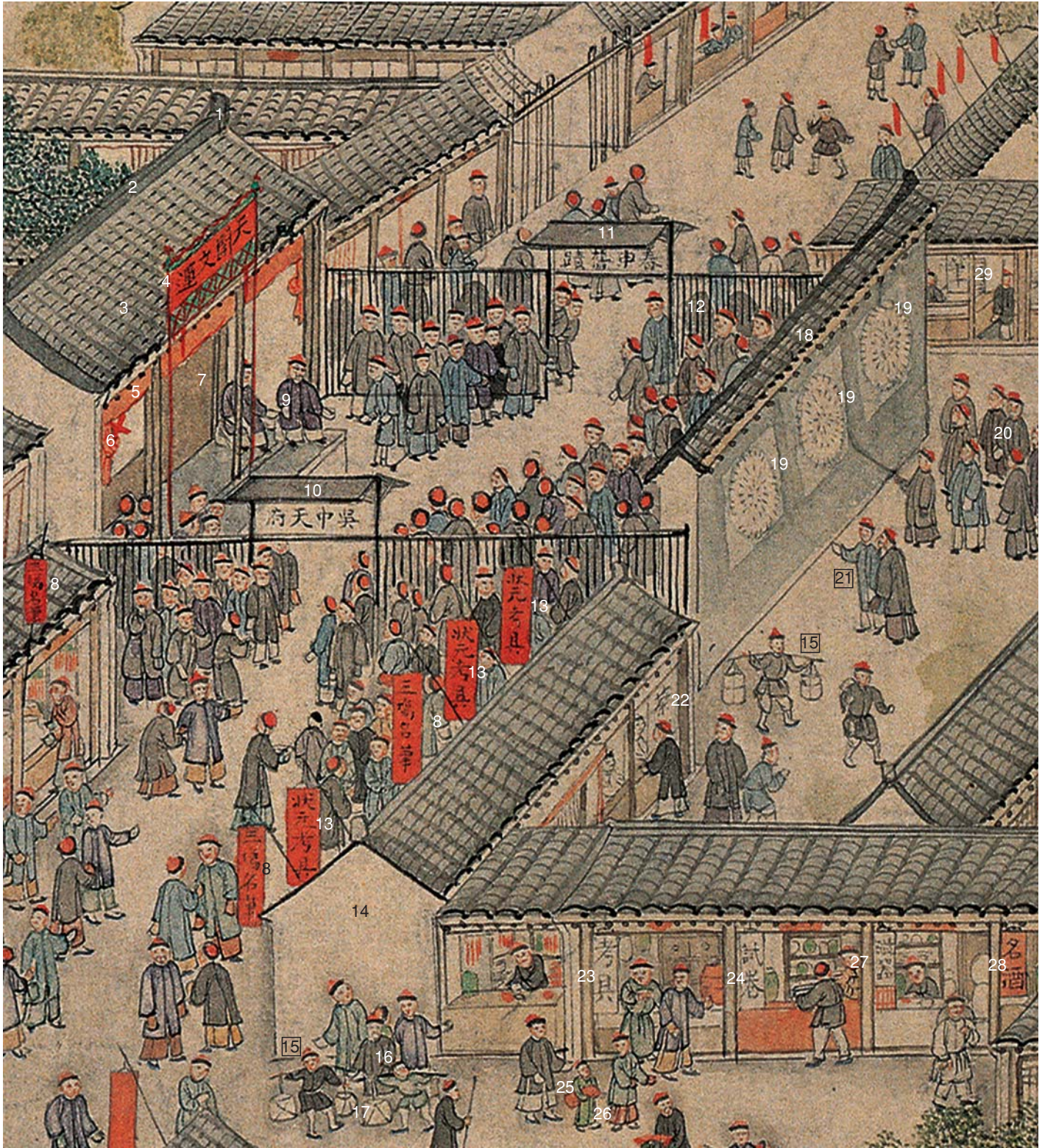


中国では清代まで、科挙と呼ばれる文官登用試験が実施されていた。そのシステムは非常に複雑であり、ここで行われている府試も科挙の予備段階の試験の一つにすぎない。画面左側の堂に座っているのが試験監督であるが、府試の試験監督は府知事自らが行った。回りには威厳を示す華蓋や芭蕉扇を持った大勢の役人が控えている。そのうち一番外側にいるのが帽子をかぶっている者たちは下級役人であり、雑用を担当する最も身分の低い者たちである。

いま府試が行われている常設の試験場を試院といい、童生と呼ばれた受験生たちが一心不乱に机に向かっている。振り向いている者もいるから、まだ試験は始まっておらず、答案用紙に名前でも書き込んでいるのであろうか。

中庭に榜と呼ばれる標示札を持った役人がいるが、これには問題が書かれた紙が貼られていて、これから場内を一周する。いよいよ試験の開始である。(佐々木)

50 試験場の門前



試験場の外に集まっているのは、付き添いの父兄や友人たちであろう。画面中央、壁に大きな丸の書いた紙が貼られているがこれは合格者発表である。府試は三回の試験からなり、各回ごとに合格者を発表したが、ここには合格者の名前が円形に書かれて

いる。

科挙の首席合格者を「状元」と呼ぶ。試験場の回りの商店街には縁起をかついだ「状元考具」（考具とは受験用品のこと）の看板が連なっている。「三場名筆」の「三場」は三回の試験を意味している。



- 1 鷓尾（正吻）
- 2 大棟（屋脊）
- 3 瓦屋根
- 4 牌楼「天開文運」
- 5 飾り暖簾（彩綱）
- 6 薬玉（彩球）
- 7 門扉
- 8 看板「三場名筆」
- 9 門番
- 10 額「吳中天府」
- 11 額「春申旧蹟」
- 12 柵
- 13 看板「状元考具」
- 14 切妻（山牆）
- 15 天秤棒で運ぶ
- 16 天秤棒（扁担）
- 17 荷
- 18 照壁
- 19 合格者揭示板（圈）
- 20 合格発表を見る人
- 21 指差して話す
- 22 看板「茶」
- 23 看板「考具」
- 24 看板「試卷」
- 25 風呂敷（包袱）
- 26 召使（書童）
- 27 看板「磁器」
- 28 看板「名酒」
- 29 看板「筆」
- 30 看板「法帖」
- 31 看板「焼酒」
- 32 対聯
- 33 太鼓橋（単拱石橋）
- 34 切石積み（条石岸）
- 35 歩み板
- 36 小船
- 37 琵琶船
- 38 艫（船）
- 39 荷
- 40 船縁（舷）
- 41 舳先（艫）
- 42 日除け（幔）

受験用品としては筆のほか、「試卷」（答案紙）も自分で購入しなくてはならなかった。

受験用具店と軒を並べて、「焼酒」や「名酒」の看板を掲げている店も目につく。必ずしも受験生のみを相手にしたわけではなかろうが、受験生の中に

は試験に何度も落ちて年をくった者も多くいたそうだから、彼らにとっては受験後の酒もまた必需品だったかも知れない。（佐々木）

51 義学

- | | | |
|-------------|-----------------|--------------|
| ① 塀 (囲牆) | ②① 座る | 41 切妻 (山牆) |
| 2 塀の上縁 (牆頂) | ②② 凭れ掛かる | 42 突上げ窓 (支窓) |
| 3 腰 (勒脚) | 23 本棚 (書架) | 43 格子 |
| ④ 吹抜門 | 24 書籍 | 44 格子戸 (榻扇) |
| 5 板屋根 | 25 方立柱 (抱框) | 45 くぐり戸 (月門) |
| 6 額「義学」 | 26 対聯 | 46 裏口 (小門) |
| 7 冠木 | 27 招福札 (門箋) | 47 楣 |
| 8 柱 | 28 開かれた本 | ④⑧ 井戸 |
| ⑨ 手に持つ | ②⑨ 跪く | 49 汲口 (井口) |
| 10 帽子 (暖帽) | 30 学生 | 50 井戸側 (井口石) |
| 11 上着 (外套) | 31 教師 | 51 敷石 (井台) |
| 12 長着 (袍子) | 32 机 | 52 天秤棒 (扁担) |
| 13 前庭 | 33 文鎮 (鎮尺) | 53 下げ緒 |
| ⑭ 基壇 (台基) | 34 大棟 (屋脊) | 54 水桶 |
| 15 葛石 (階條石) | ③⑤ 瓦屋根 | 55 笠 |
| 16 欄干 | 36 平瓦 (青瓦) | 56 上着 (短衣) |
| 17 長机 | 37 瓦の列 (瓦壟) | 57 扱き帯 (汗巾) |
| 18 紙 | 38 下向きの瓦 (合瓦) | 58 ズボン (褲子) |
| 19 硯 | 39 瓦の列の間の溝 (当溝) | |
| 20 腰掛け (板凳) | ④⑩ 母屋 | |

義学とその周辺である。

中国では科挙の制度が頂点を迎えたのは明代であった。明代の初期、中高等教育は中央の国子監及び各府、州、県の儒学に、基礎教育は元代から踏襲した50戸ごとの社学によってそれぞれ担われ、官学の教育システムが完備されていた。しかし中期以降、社学が次第に廃れ、その役割は私学にとって代わられた。

私学には、宗族内の子弟のための「家塾」、科挙の脱落者や左遷された官僚・知識人による「学館」など幾つかの形態があった。北宋の時代からだと言われる「義学」も私学の一つである。「義」には貧しい人や不幸な人をいたわり救済する意味があり、「義学」とは即ち教育費が払えない者のための教育機関である。地方官や地主などによる全額出資、祠堂や義田などの収入、個人の寄付など、その資金の由来は多様である。入学年齢に制限がなく、一カ所では教師が1人、学生が4、5人から十数人であるの



が一般的だという。教育内容は、『三字経』『百家姓』『千字文』などの読み書き、簡単な作文算数などが主である。

画面の義学は、飾りが見られず素朴な作りであった。門は扉がない吹抜式になっており、やや広い前庭を抜けると南向きの三間の平屋が教室となっている。さらに左の通路をって奥に行くと、簡素な建



物が見られ、恐らく教師の住居であろう。南の妻に窓が開かれている。

新年の対聯書きは私学の教師の収入源の一つでもあるが、柱の対聯も教師の手によるものであろう。左奥に大きな本棚が見られ、帙入りの書籍が整然と並べられている。中央よりやや左に、一人の学生が跪いて腰掛に置いている本を眺めている。先生の前

で暗唱が出来ず、罰を受けているのかもしれない。一人の学生が教師の側でかしまって教えを受けており、他の学生はそれぞれ自分の勉強をしている。私学では、基本的に個別教授であり、先生の講釈と学生の暗唱が主要な方式であった。学生の服装が統一されているように見え、右側の中央にいる者が教師の助手だと思われる。(王)